

# 上田の歴史を学ぶ

# 講演会

**演題** 上田軍記にみる真田家と二度の上田合戦

**日時** 平成26年11月22日(土) 13:30～15:30

**講師** 堀内泰 先生 (「信州上田軍記 (ほおずき書籍)」 訳者)

## 1. はじめに

- ・「上田軍記」との出会い

## 2. 第一次上田合戦(神川合戦)

- ・合戦前の情勢
- ・合戦の様子
- ・豊臣秀吉への臣従

## 3. 第二次上田合戦

- ・合戦前の情勢
- ・合戦の様子
- ・九度山への蟄居

※参考ホームページ

- ・「信州上田軍記」 <http://museum.umic.jp/uedagunki/>

＝ 上田軍記にみる真田家と二度の上田合戦 ＝

平成26年11月22日（土） 堀内 泰

《はじめに》

○「上田軍記」との出会い

北条家本→清水家本→進徳館本（高遠藩藩校）→久保田家本（上田市立博物館）

1 第一次上田合戦（神川合戦）

1) 合戦前の情勢

○天正10年（1582）3月、武田勝頼甲州田野の天目山で自刃。

6月、織田信長京都本能寺で自刃。

○信長から武田氏の旧領の支配を任せられていた武将たちが自領へ退去すると、上杉景勝は信州川中島へ、北条氏政は甲州郡内へ、徳川家康は甲州府中へ、北条氏直（氏政の子）は上州から信州佐久へと侵入。

○真田昌幸は武田氏滅亡後、信長の将滝川一益に臣従。滝川が去ると北条氏、次いで徳川氏に臣従。

○徳川氏と北条氏の間で、甲州と信州佐久は徳川氏、上州は北条氏ということで和議が成立。上州沼田を北条氏へ渡せという徳川氏の命令に反発した真田昌幸は 天正13年（1585）8月徳川氏と手切れをし、次男信繁（幸村）を人質として送り上杉景勝に好<sup>よしみ</sup>を通じる。

<家臣>「家康公の武威を見るに日々にお募り候也。その上今日までもお味方をなされてご忠節を尽くされしことなれば、沼田をお渡し有る程ならば定めてその替え地をも早速遣わさるべき也。打ち捨て置かるることは有るまじく候也。家康公の仰せ越さるる旨に任せられしかるべし。」

<昌幸>「汝等が申す処も尤も也。去りながら、沼田を相渡したるその上に替え地の儀は沙汰もなく、上田をも相渡すべしと有る時はいかが思うぞ。」

<家臣>「左様に理不尽なることは有るまじく候也。若し左様に有るものならば、何れとも一命を捨て籠城仕るべし。」

<昌幸>「この度沼田の城をあい渡して小身になり、その上にてたまわら

んとあるおのおのが一命をただ今申し受くべきなり。とかく手切れにするほどならば、沼田の城をもあいにかかえて手切れにするがよき謀なり。」

## 2) 合戦の様子

○天正13年(1585)8月、徳川家康は甲州若神子まで出馬し、鳥居元忠・大久保忠世・岡部政綱・平岩親吉等を大将として7,000余騎を上田へ差し向ける。徳川勢は閏8月2日長瀬河原から猫の瀬を渡り、国分寺表を経て上田城へと迫ってきた。

○上田勢は雑兵を含め2,000余り。上杉氏の援軍は塩尻口まで来て後詰めをした。(真田町の「曲尾口」と言うのが今日の通説。)

○昌幸は町中に防御のための柵を設置し、信幸・信繁に2・300人を添え神川を前に陣を敷かせ、自らは500人ばかりの兵とともに上田城に控え、櫓やぐらにのぼり柵津長右衛門を相手に碁を打っていたという。信幸・信繁は神川を越えてきた敵勢と黒坪辺りでせり合い、押しつ押しされつしながら横曲輪へと引き取った。

○徳川勢が上田城に迫ると、昌幸は大手の門を開き太鼓の音とともに討って出た。信幸・信繁は横から突いて掛かり町屋に火を掛けた。城中からの太鼓の音を合図に農民3,000人余りが紙旗を差し連ね、徳川勢の後方に討って掛かった。攻める時には苦にもならなかった防御柵(千鳥掛け)が邪魔になり進退を失った。そこへ信幸・信繁が染ヶ馬場(染屋の土手)から突いて掛かり、徳川勢を国分寺辺りまで追い討った。

○徳川勢は神川を背に死を決意した。それと見た昌幸が引き揚げを命じたので、徳川勢は川を越えて引き揚げた。少し遅れて鳥居元忠が軍兵を率いて川を渡ろうとした時、昌幸は再び突いて掛からせた。折から神川の水が夥しく増え、徳川勢の多くが溺れてしまった。

○真田父子が軍兵を引き揚げ、首実検をしたところ1,300余りあった。水に溺れた者は数が知れないほどであった。上田勢は死者は40人余りに過ぎなかったという。

○丸子合戦にも敗れた徳川勢は、引こうとすれば攻められ、攻めようとすれば逃げられ動きが取れなくなってしまった。9月に井伊直政・松平康重が5,000余騎を率いて着陣し、徳川勢は大久保忠教ただたかを小諸城に押さえとして残し引き揚げた。

### <烏帽子形の城合戦>

○第一次上田合戦の時、塩田(川西)方面の者たちが杉原四郎兵衛を大将

として烏帽子形の城に立て籠もり真田昌幸に叛旗を翻した。これを信幸が厩別当（馬丁）の水出大蔵の進言を入れて攻撃し、杉原四郎兵衛他を生け捕りにした。

<水出>「この城の体を見申すに、前は嶮岨にして後ろはなるく候なり。鉄砲の者を後ろの方へ廻し、後ろの方より打ち申しなば城中こらえ難く候わん。」

○昌幸は引き出された杉原を見て「彼の者由緒ある者なり。用にも立つべき者なり」とて赦免し、信幸の家人の列に召し遣わされた。

○この城の即時に落城したことを信幸は後に、次のように物語っている。「水出が一言は誰も知りたることなれども、時に当たっては心の付かぬものなり。厩別当の推参がましきことなれども、彼は処の案内を知りたる故なり。大蔵が謀を用いて勝利を得たるは新しきことなれども、戦場にてはなおもってその人によらず、道理に従い宜しきに任すべし。軽き者なりとて侮り大蔵が申すことを聞き入れずば、この城一時には落去すまじき。」

### 3) 豊臣秀吉への臣従

○豊臣秀吉に出仕、秀吉の仲介で徳川家康とも和睦。

○天正17年（1589）沼田を北条氏へ渡す（替え地は伊那箕輪の地。）

その後、北条氏滅亡後、沼田の地は再び昌幸に与えられた。

※昌幸は五女を石田三成の義弟宇田頼次に嫁がせている。

信幸は徳川家康の養女（本多忠勝の娘）を妻とする。

信繁は石田三成の盟友大谷義継の娘を妻とする。

## 2 第二次上田合戦

### 1) 合戦前の情勢

○慶長5年（1600）6月、真田昌幸父子は会津の上杉景勝征伐を目指し徳川家康に従い関東を北上していた。下野犬伏に至った時、大坂方（西軍）からの密書（長束正家・増田長盛・前田玄以の連署状、7月17日付）が届いた。昌幸父子はどうすべきかを相談し、昌幸と信繁は大坂方へ、信幸は徳川方（東軍）へ、それぞれ味方することになった。

○昌幸・信繁は上田城へ。7月24日、信幸は父昌幸と弟信繁が大坂方に応じたことを家康に報告。7月27日、徳川家康は信幸に昌幸の所領小泉の地を宛がうことを約束。

○家康は下野小山から一旦江戸城に帰り、9月1日に東海道を西上。

○徳川秀忠は38,000余騎を率い下野宇都宮から中山道を西上し、9月2日小諸城に入る。翌3日秀忠が上田城へ本多忠政と真田信幸を使者として遣わすと、昌幸は国分寺で迎えて接待し、家臣を説得することを理由に返答を引き延ばし籠城の準備を整えた。4日に催促されると「秀忠公の御意の趣き身に余りかたじけなく畏まり奉りて候えども、秀頼公の仰せとして老中ならびに奉行石田治部が方より申し遣わし候につきて、主命のがれ難く存じかくの通りに候なり。しかれば向後ともに兩人参り候こと無用なり」と申し切って、お使いを返した。

## 2) 合戦の様子

○徳川秀忠、小諸を進発し旗を染屋の台に立て、城下の稲を刈らせた。

○昌幸・信繁は時々兵を出して突き戦い、さっと城中へ引き取り堅固に守った。

○秀忠は森右近大夫を小諸に残し、9月11日に役行者えんのぎようじや越えで関ヶ原へ向かった。

○関ヶ原の戦いは9月15日徳川方の勝利に終わったが、秀忠の軍は間に合わなかった。

## 3) 九度山への蟄居

○信幸の命乞いにより、昌幸・信繁は紀州九度山へ配流となった。(その後、昌幸は慶長16年(1611)紀州九度山で病死(65歳)。信繁は慶長20年(1615)摂津大坂で戦死(49歳)。

### 《おわりに》

○真田昌幸父子は、それぞれ武将としての資質に恵まれていた。

戦国の世を巧みに泳いだ昌幸・隠忍自重し家を残した信幸(信之)・義に生き名を後世に残した信繁(幸村)

○上杉攻めに向かっていた昌幸が、次男信繁とともに野州いぬぶし犬伏から引き揚げ大坂方に付いたのは、①沼田領を巡っての徳川家康への不信感と、②豊臣系武将との縁組み、③第一次上田合戦の際に後詰めをしてくれた上杉景勝、徳川家の重臣石川数正を寝返らせ後方支援してくれた豊臣家への恩義などが考えられる。

○譜代大名中心の秀忠軍が関ヶ原の戦いに間に合わなかったことが、家康軍の中核を成した外様大名の勢力を温存することにつながり、幕末に至っての倒幕への火種を残すことになった。

# 第一次上田合戦図

## 天正十三年（1585年）

### ④ 上田城の攻防

徳川勢は勝ちに乗り城下へと迫ったが、真田勢の伏兵に攻め立てられ大混乱に陥った。

### ⑤ 真田勢の反撃

反撃に転じた真田勢は徳川勢を神川に追い詰めた。

### ⑥ 徳川勢の敗退

神川を背にした徳川勢は真田勢に攻め立てられて戦死したり、増水した神川の水に流されたりした。

### ③ 真田勢のおとり作戦

神川付近に布陣した真田勢のおとりの誘いに乗り、徳川勢は上田城下におびき寄せられた。

### ⑧ 手白塚の牽制

真田昌幸父子は海野から八重原の下を通り、塩川の手白塚（現上田市狐塚付近）に軍を進め徳川勢を牽制した。

### ⑨ 一進一退の攻防

戦線は膠着状態に陥り、一進一退を繰り返した。

### ② 上田城攻め

閏8月2日、徳川勢は長瀬河原を経て子この瀬を渡り上田城攻めに向った。

### ① 徳川勢の本陣

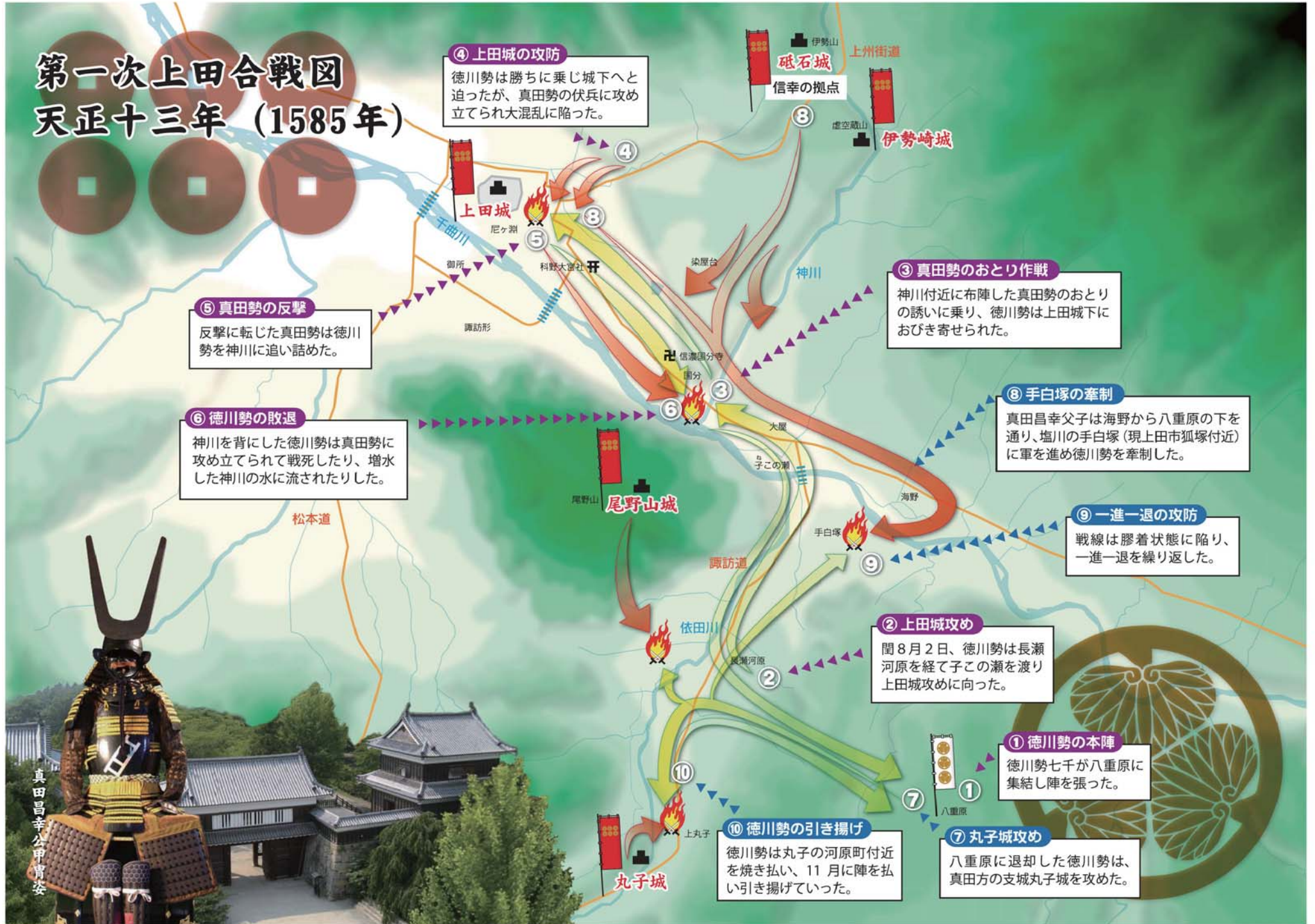
徳川勢七千が八重原に集結し陣を張った。

### ⑦ 丸子城攻め

八重原に退却した徳川勢は、真田方の支城丸子城を攻めた。

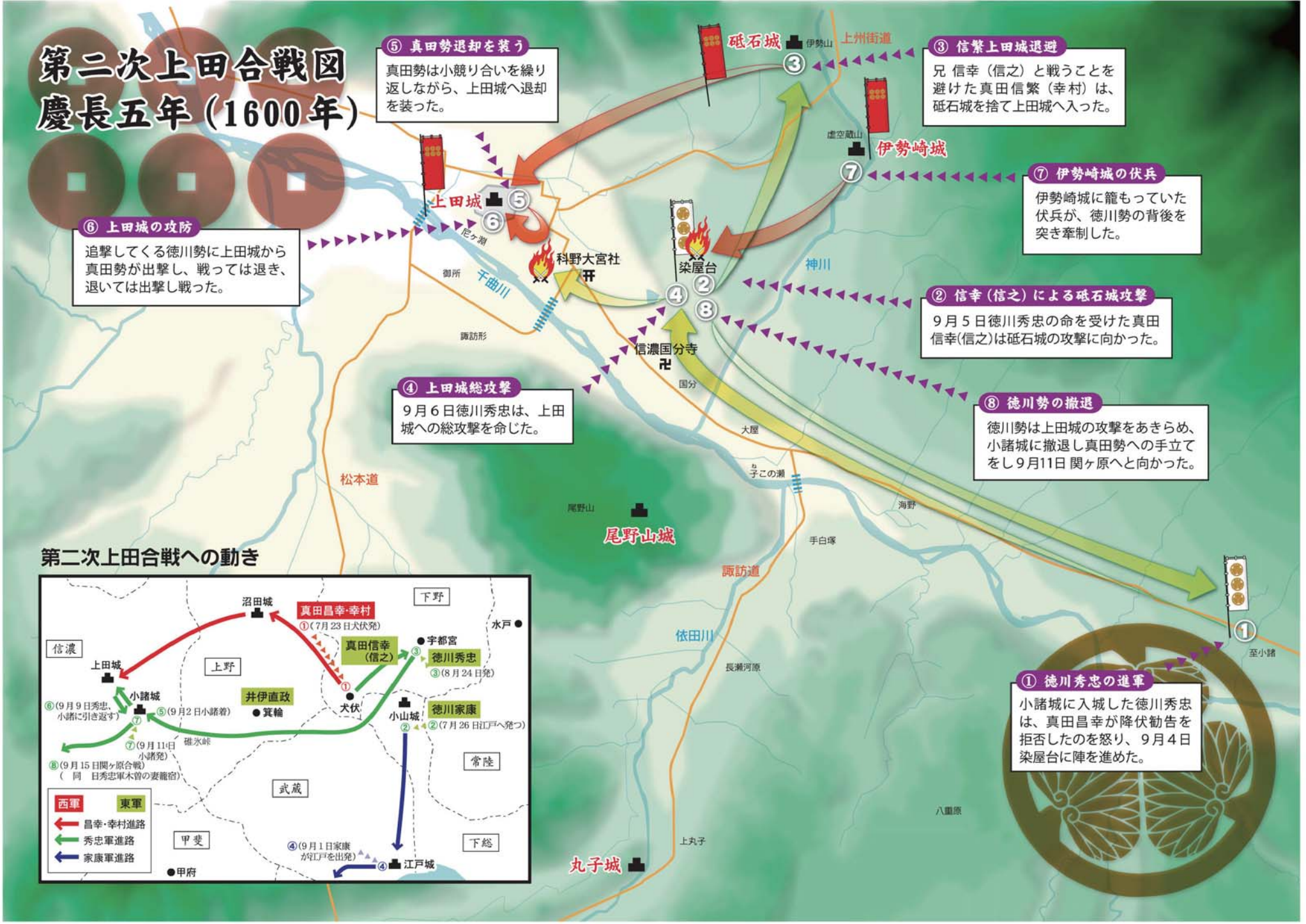
### ⑩ 徳川勢の引き揚げ

徳川勢は丸子の河原町付近を焼き払い、11月に陣を払い引き揚げていった。



真田昌幸公甲冑姿

# 第二次上田合戦図 慶長五年(1600年)



**⑤ 真田勢退却を装う**  
真田勢は小競り合いを繰り返しながら、上田城へ退却を装った。

**③ 信繁上田城退避**  
兄 信幸(信之)と戦うことを避けた真田信繁(幸村)は、砥石城を捨て上田城へ入った。

**⑦ 伊勢崎城の伏兵**  
伊勢崎城に籠もっていた伏兵が、徳川勢の背後を突き牽制した。

**② 信幸(信之)による砥石城攻撃**  
9月5日徳川秀忠の命を受けた真田信幸(信之)は砥石城の攻撃に向かった。

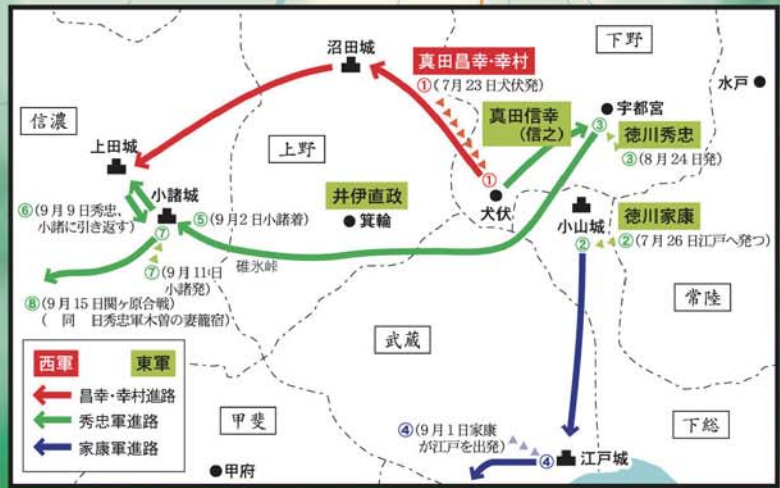
**⑧ 徳川勢の撤退**  
徳川勢は上田城の攻撃をあきらめ、小諸城に撤退し真田勢への手立てをし9月11日関ヶ原へと向かった。

**④ 上田城総攻撃**  
9月6日徳川秀忠は、上田城への総攻撃を命じた。

**⑥ 上田城の攻防**  
追撃してくる徳川勢に上田城から真田勢が出撃し、戦っては退き、退いては出撃し戦った。

**① 徳川秀忠の進軍**  
小諸城に入城した徳川秀忠は、真田昌幸が降伏勧告を拒否したのを怒り、9月4日染屋台に陣を進めた。

## 第二次上田合戦への動き



**西軍** 昌幸・幸村進路  
**東軍** 秀忠軍進路  
家康軍進路

武威

甲斐

●甲府

丸子城

上丸子

八重原

依田川

長瀬河原

諏訪道

手白塚

子この浦

大屋

信濃国分寺

国分

染屋台

科野大宮社

御所

千曲川

砥石城

伊勢山

上州街道

伊勢崎城

虚空蔵山

尾野山城

尾野山

松本道

海野

至小諸

水戸

下野

宇都宮

大伏

小山

江戸

常陸

下総

信濃

上野

沼田

信濃

上田

小諸

碓氷峠

碓氷峠

碓氷峠

碓氷峠

碓氷峠

碓氷峠